
かんらんしゃ

THE,syousetuman

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かんらんしゃ

【Nコード】

N3466V

【作者名】

THE , s y o u s e t u m a n

【あらすじ】

美紀は高校に楽しく通っていた。しかし、昔は癌で一回倒れていた。そして、「再発」の可能性があとといわれた。その文字の通り、学校の授業中突然椅子から倒れ意識をなくした。検査をすると癌が発見。再発が起ったと思っただけなのに。でも、美紀には好きな人がいた！？サイコーに面白くて感動のラブストーリーが今始まる！

ニュース（出来事）（前書き）

またまた今回から小説を書き始めました！
どんどん公開していきたいと思います！

ニュース（出来事）

運命の出会い。あたしはしたことない。

でも、偶然と偶然が重なったとき奇跡は起こる。

期待していればなかなか訪れない。

期待してなくても出会いは訪れるもの。

でも、あたしだけは違った。

ほかの人と違う、何かが。

あたしだけは、生きるだけでも精一杯だった。

「では皆さん。今日のHRの授業は生きる、ということについて少し考えてみましょう。」

その時にドワツとした雰囲気になった。一人の生徒のおかげで。

「せんせー。生きるって、もう生きてるんで考えなくてもいいんじゃないですかあ？」

実は、こっそりとあたしも同感であった。

先生はお構いなしに黙りなさい！と一言言った。また嫌な雰囲気が出た。

「ではでは、生きるということはどういうことなのかを考えてみてください。」

やっと考えだしたみんなだった。

このクラスは美川みかわこうこう高校、3年2組だ。35人で構成されていて、こういう時には班になって考えるのだ。

まあ、あたしの班は5人と中途半端な机の並びになっちゃう人数なんだけど、一人出て行ってほしかったのが心の行く末だ。（殴

「ねえね美紀。なんでこんなことしなきゃなんないのだからね。」

「あ、あたしに聞かないでよ。」

「美紀、あたしはこう思うのよ。生きるってことは、その目的を探すために生きる…なんちゃって…って！何言っただろあたしそん

なこ・・・」

先を言おうとしたときあたしは止めた。

「はいはい。もうこれ以上言わなくていいからさ。」

結衣は、はーっとため息をついて黙ってしまった。

だが、この沈黙をどうにかしてくれたのは先生だった。

「ではでは、1班から順に発表してもらいましょう。では、一班さんお願いします。」

良かったー。ね・・・って！あたし1班じゃん！しかも班長だった！スツカリ・・・

「はい、では美紀さんから発表してもらいましょうかね。」

「えーっと、あたしは・・・」

あたしは勇気を振りしぼって言った。

「生きるということ自体い、生きる目的を探すために生きているのだと、思いますう」

その時、教室は閑散となった。

シーン。もしかしてあたし・・・これ言っちゃ悪かった！？

いや、皆あたまがごちゃごちゃになって意味が分からないだけだった。

「は、はい。有難うね。では続いて2班に行きましょうか。」

あわててあたしは座ったのだが、静かな声で結衣にぶつかった。

「な、何言ってるのよ！どうしてくれるのよこの空気！」

「ゴメンなっとうさぎんぎら〜。」

調子に乗っていった結衣だったがあっさり滑ってしまった。

結局それから2〜6班まで流れるようにしてこの時間が終わった。

「ねえ、ごめんね今日・・・」

突然結衣が謝ってきたのに対して、恐ろしく驚いた美紀だった。

「いやいや。あたしが面白かったからいいよ。」

「なんやそれ！」

「いやーでも、あたしだけ受けたよ。ホントに！」

結衣はおかしな表情を浮かべた。

「そう…ならいいんだけど。」

二人はのっそりと夕方の空の中駆け抜けていった。

「お母さん。明日って…」

「そうよ美紀。5年目の定期検診があるのよ。」

実は美紀、6歳のころ小児ガンが発見されたのだ。

早期発見で無事切除できたのだが、再発の可能性は大きい。なので、総合病院に5年に一回検診に行っているのだ。

「何もなかったらいいんだけどね。」

「6歳のころ」

「では、最後の授業は図工ですね。君たちは動物いるでしょ？好きなね。」

はい！と元気よく答えた。

「それを目の前にある粘土で作ってみてください。時間いっぱい使ってくださいよ。」

と、急にビリビリと袋を破る音がしてそれからシーンとした空気が続いた。

「ねえ、あたし何…」

ファッ。急に体が軽くなり…次の瞬間に目の前が真っ暗になった。

「大丈夫！？美紀ちゃん！美紀ちゃん！」

そのまま、総合救急センターに搬送された。

「お母さん。聞いてください。」

「何でしょうか…？」

「今回の症例は随分と多いのです。神経芽細胞種という病気で腎臓の上にある副臓というところから発症します。」

「で！結果は！どうなんですか！」

「無事切除できましたが、再発防止のため5年に一回定期検診に来ていただきたいのですが…」

「ま、明日は心配しなくていいわよ。きっと大丈夫。」

「まあ、あたしは心配してないけど……」

「そろそろ寝なさい。もう11時よ。」

「うん。お休みー。」

ニュース（出来事）（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。
次回もお楽しみください。

革命（前書き）

この日美紀の好きになる人が現れる！？
美紀にとっては最高の一日になるはずだった…

革命

三谷総合病院。これがお世話になっている病院だ。

「えー、まず一言。よく来てくださいました。」

「いえいえ！美紀のためならいくらでもしますわよ。ねえ。」

美紀は静かに、お母さん！と背中をつついた。

「まあ、まだ仲がいいようですね。」

安河内は、はははと笑った。

やすこうちずか

安河内静香。男。この人がとても面白い担当医師だ。

笑いすぎで肺を痛めたことがあるとか…。アホラシイ。

「では、まず日程から見ていきますので。」

医師は1枚の紙を差し出した。

上には「検査日程表」と書かれてあった。

「では、まず心電図に回ってください。その次はMRI。次にエコー検査。」

次に血液検査を実施します。最後は検査結果報告、ということになります。

いろいろ大変ですがまあ、よろしくお願いします。」

そして、大量の記入用紙が安河内から渡された。

これを見るだけでもすごく複雑な思いがわき出てくる。

11時半・・・心電図検査。恐ろしく気分が悪い…。

12時20分・・・MRI検診。

12時40分・・・エコー検査。めちゃくちゃこそばい…。

1時30分・・・血液検査…。看護師が荒く、2回も針を刺すことに。

そして、4時半。検査結果を聞きに来る時が来た。

この一瞬があたしは怖い。

「では早速。：異常は見受けられませんでした。」
キツパリいう人だ。：

「え、ほんとなんですか!？」

めちやくちや驚いた。

「ええ。ただ。：」

「ただ。：？」

「これからはもう来なくていいです。再発することもないでしょう。」

「

「ほんとなんですか!？」

「ええ。この年になれば、再発はないでしょう。」

とかなんとか、安河内の声を復唱しながら車に揺られていた。

「美紀、良かったね。ママ安心したよ。」

「うん!明日からめいっばい遊ぼつと!」

さ、二日ぶりの学校!どうなってるのかな?

わくわくしながら教室のドアを開けた途端。：。：。

「キャッ!」

どんつ。誰かとぶつかった。

「美紀!お前これ忘れて帰ってたろ。ホイ、ノート。」

彼は、^{ひがしのたかし}東野隆だ。学級委員をお勤め中だ。

フワツとしている間に、隆が通り過ぎて行った。

その時、彼からミントの香りがした。

だが、その瞬間あたしの心が一瞬鳴り響いた。この気持ち、なんだろう。：。

隆君。：ミント。

革命（後書き）

ご覧いただきありがとうございます！

次回も是非お楽しみに待っててください！！

数学とまた明日。(前書き)

この章の中に出てくる「X」は
数学で使われる筆記体の「X」です。

数学とまた明日。

「ねえねえ、聞いてよ！」

あたしは結衣・かな・美佐^{みさ}に囲まれていた。

「何なのよ！」

「あたし…好きな人ができたかもしれない！」

えー！つと3人は大声を上げた。

恥ずかしさのあまりに美紀は顔を赤くして下を向いた。

つて！あたしこんなんじゃないダメ…。

美佐が堂々と声を出した。

「で、でで？誰なの？その好きな人つて。」

3人はめちゃくちゃ知りたそうな顔をしていたが、教えたくないな
I。

「誰！？誰なのよ！」

「ゴメン…ひ・み・つ。」

ガクツと3人は体の力が抜けた。

「何やそれ！教えてくれたっていいじゃん？」

「いやいや。こういうのは秘密主義っていうのかな？」

「さあ！早く明かしたもう。美紀さま。」

「いやつてったらイヤなの！」

かなが何か言おうとしたとき、昼休み終わりのチャイムが鳴った。
一斉に教室の椅子に座り始めた。

「ではですね、今日はね方程式の公式についてねやっていきたいと
ね思います。」

パラパラと教科書とノートの開く音が一斉にした。この音：いや。

「ではね、AとBにね置き換えてやってみましょう。右辺はこのよ
うにね因数分解ができるようになってますのでね、分解しましょう。
えーとね、美紀さん。」

何故！？何故にあたし？

「は、はい！」

「この式を因数分解すればいくらになりますかね？」

「えー…… $\times 2$ 乗 $+81$ です。」

「はい、そうですね。座っていいですよ。」

「はー。静かにため息をついた。」

「そうですね。で、この $\times 2$ 乗を左辺に移行しますね。その時に、符号を変えるのをね忘れないようにねしましょう。では、この左辺はいくらですかね？えー、東野隆君」

その時、あたしはドキッとした。

なんで、こーゆータイミングで名前呼ぶかなー！！

「 $13 \times$ プラス 2です。」

すらすら答えていく隆に釘づけになっていた。

「はい、有難う。こういうことですね。でね、次にルートと \times をね、まとめてね……」

あれからたんとと授業は終わっていった。

「ねえ、今回は「ね」を何回言ってたでしょうか！」

急に結衣が押しかけてきた。

「あたしが数えたところでは92回だったけど……。」

「いーや！今回は267回だったぞ！」

ぞ……って。こいつのおかげで今数学の危機に立たされてるっていうのに……。

しかも、「ね」という言葉があんまり先生の口癖。

いい加減直してくれないかなー！！

「とか思っちゃったり……。」

あっさりと美紀の口から続きがもれてしまった。

「ん？何か言った？」

「い、い、いやなんでもないよ！うん。」

その次の日。4人で話していた。暇なときにはこうして集まって、いわばガールズトークをする。

美佐、かな、結衣、そしてあたしは今美佐の家で遊んでいた。遊ぶって言っても、ガールズトークやゲームばっかなんだけどね。

「ねえ、好きな人に何処で告白されたい！？特に美紀！」

「な、何なのよ！」

あたし以外の3人はクスクス笑っていた。今すぐ蹴り飛ばしたい気分だ…。

「場所よ！どこで告白されたいのかな！？」

「って！な・ん・で、こんなことになるわけなの！？」

「いいじゃん別に。今日は秘密のガールズトークショウってことで！」

ガールズトーク…ショウってなんだよ。ショウって！

「仕方ないなー。秘密にするんだぞ！」

ぞ、という言葉を初めて使った。案外似合うもんだなあ。

イエーイ！と3人が叫んだ。お決まりの通りだ。

「えつと、あたしは…観覧車、かな？」

シーン。

「かんらんしゃー！」

シーン…？

「何なのよシーンとして！」

「なーんだ。」

3人そろってまた言った。

「もつと面白い場所言ってくるのかと思った。」

「な！なんで面白い場所なのよ！せつかくまじめに言ったのに…」

「あーゴメンゴメン！つい興奮しちゃって…」

興奮。何故に興奮するの。美佐以外の人はまたクスクス笑った。ちなみにあたしも。

美佐はプイツと後ろを向いてしまった。

こんな状況が5分と続いてしまった…。

結局のちに外にみんな遊びに行った。仲直りが早いあたしたちだったのだった。

「あーめんど！」

大きなため息を吐いた結衣はあたしと二人で登校していた。

「ちよつとうるさい！」

「どつちが？」

どつちが…って…。

結衣の声もうるさいし、結衣が今乗っている自転車の音もうるさい。ギーギーと音がして、一番あたしが嫌いな音のパターンだ。

この黒板をこするような音…。どうにかしてほしいわ！

そう思いながら無言のひと時が続き学校についた。

なんだか今日一日がスラスラと過ぎてゆく…。

週明けにしては随分早く感じた。何かを待ちわびているかのように。ただ、緊張はここから続いた。

「美紀、ゴメン今日委員会だよ。」

「えーみんな委員会！？あたしの所なんか先生いなくて休みだよ…。」

「って！話しているのに聞け！（殴

何故に逃げるように去る…。

だが、東野隆だけは美紀と同じ委員会だった。

どうしようか…声かけようかなあ…。一緒に…

と思った時には隆の隣にちよこんと立っていた。

「な…なんだい？美紀さん！？」

ちよつ…なんで立ってんのよ。先に体が動いてしまった…

「き、今日一緒に…帰らない？相手が…いないし…っていうか、でも…」

この変な言葉のつながりを止めたのは隆だった。

「いいよ別に。今日は何もなし。」

ウツヒヤー！ラッキーだよ今日！一緒に帰れるなんて…。

「ねえ。東野君って…何歳？」

「って！！あたし初っ端から何聞いてんのよ！」

「え…15歳だけど…」

「う…うん。あ！それから隆君って…好きな人…いるの？」

「ゲ…。何やってんのよ！あたしの口！」

「え…どうしたの急に…。美紀さんそんなキャラだったっけ？」

「え…まあ、そんな…。とにかく教えて！」

「俺はなあ…」

俺は？何何何！！！！何なのよ！！

「俺は…いないかな？」

……………お！？チャン

ス？

「そうなんだ…」

「ゴメン俺ここ曲がったら家だから。じゃあまた明日！」

「うん。バイバイ！！」

また明日…。いい言葉！また明日会えるんだもん。

数学とまた明日。(後書き)

ごらんいただきありがとうございます！
次回もお楽しみください！！

おそろしい事実（前書き）

とうとう美紀の体に異変が起こり始める…。
一体どうなるのだろうか…

おそろしい事実

「はい。今日はですね、イオンについて勉強していきましょう。皆はバサバサとノートと本を開いた。」

でもあたしだけは違った。何だか知らないけど頭がまわらない。

「では、この前実験した通り結果を発表してもらいましょう。では田島君。」

「塩化物イオンがこちらに移動して亜鉛を溶かしていきました。」

「はい、有難う。では、今から復習していききたいと思います。では、こちらの席か」

順に言っていてください。ではCuはなんだった？」

「えー、銅…？」

「では後ろ、Cu」

「塩素です！」

うー、頭が痛い。目の前が暗くなってきた…。何だこれ…。

「はい、続いてMgはなんですか？」

う…歪んでいく…世界が。

「次、美紀さん！」

な…声が出せな…。

「美紀さん？」

そして、突然視界が真っ暗になり全身の力が抜けた。

「大丈夫ですか？」

「何処ですか…ここは。」

周りを見渡したが認識できない。

「私を覚えているかね？」

「あ…安河内先生？」

「そうだ。保健室で休ましても意識が戻らなかったから先生がここまで連れてきてれたんだぞ。感謝せい。はははは！」

くっそ…よく余裕で笑えるな。

「あ、それと今日は母さんが迎えに来てくれるから一緒に帰りなさい。」

「でも…まだ学校が…。」

「ダメだ。今日はもう帰りなさい。無理するとまた体に負担をかけるぞ。」

「はい。分かりました。」

ちよつと偉そうな口調で言った。

「よしよし。じゃ、下まで送ろう。」

そこまでしなくてもいいのに…ね。

「ゴメン美紀先車に乗ってて。ちよつと安河内さんと話があるので。」

「

「うん。」

母さんは、そのまま先生の前まで駆けて行った。

「で、何なんですか？早く帰りたいんですけど…。」

「実はですね……………」

そのまま沈黙の時間が続いた。

「明日、美紀ちゃんを送った後病院によってください。詳しく話をいたしますので。」

「わかりました。」

家まで沈黙した車内に閉じ込められていた。

後日、美紀を学校に送った後母は急いで車を走らせた。

何だろう…。過去の経験が頭をよぎる。

「忙しい中来てくださり有難うございます。6階の会議室にて安河内先生がお待ちです。」

案内役のナースさんが出迎えてくれた。帽子の横からちょこんと出ている髪の毛が気になったが…。

そんなこともつかの間、高速エレベーターで昇り会議室のドアを握

った。

ドアの音と同時に母さんの心臓がドクツとなった。

入ってから右側に安河内がいた。安河内は深々と頭を下げた。

「あ…お忙しい中お越しくださいましてありがとうございます。」

「いえいえ。こちらこそ…」

差し出された椅子に母は座った。

「今日はわかってますね。重要なお話が。」

「分かってます。さっそくお願いします。」

安河内の右頬には一汗垂れてきていた。

「えーつとですね、こちらは肺のレントゲン写真なんですけど、注目すべき点はここじゃないんです。」

母は焦った。

「そ、それってどういうことですか？」

「この下に移っているこの一部を見てください。ちょっと怪しい白い点が見受けられます。」

「それは…もしかして…」

「はい、こちら側で大まかな検査したところガンだと思われま

しかも、再発したがんではなく新しいがんです。」

「つまり…新しくできた…ガン？」

「はい。細胞腫から転移することはなかなかないはずで

さっそく明日精密検査に来て頂きたいのですが…。」

「ねえ美紀！今日の弁当何か張り切ってない??」

「そ、そんなことないわよ!!」

実際恥ずかしい…。ご飯にハート形の海苔。その上にピンク色のふりかけが乗ってある…。

全く…。人の気も知らないで。

美紀は箸に一つご飯をつかみゴクツと飲み込んだ。

グツツ！急に激痛が走った。

「痛っ!!」

美紀は思いつきり胸をつかんだ。何なのこの痛さ…。

「美紀？どうかしたの？」

「う、うん。大丈夫！」

「ちょっと心配なんだけど…何かここ最近あった？」

美紀は答えられなかった。

自分でも何が起こっているのかわからなかった。

「美紀、ちょっと話があるから座って。」

ソロツと美紀は母のそばに駆け寄った。

「単刀直入に言くと、体に何か異変が起きてるらしいのよ。検査結果でわかったの。」

「まさか、嘘…」

「まだ決まったわけじゃないのよ！明日、静先生が精密検査しに来いと…」

その途端、美紀は何かがおかしくなった。

「どうして！どうしてあたしばっかりこんな目に合わなくちゃならないのよ！」

お母さんは下を向いたまま黙っていた。

「ねえ！何で？なんでなのよ！」

「美紀…今日はもう寝なさい。」

涙を流しもってまでも、美紀は言い張った。

「なんでなのよ…なんで…」

「美紀！黙りなさい！！！！！」

母の声に美紀は一瞬で泣き止んだ。この日初めて母の怖さを知った…。

震えながらも自室へ向かっていったのであった。

おそろしい事実（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。
次回もお楽しみください。

人生の岐路（上）

何も考えない…。頭の中は真っ白状態。

これが夜が明けるまで続いた。結局美紀は一日寝れなかった…。

しかし、特に不安が募る一日だった。

木曜日、朝7時半。

美紀とお母さんは車に揺られていた。しゃべることは一切なかった。珍しく話したがり屋の美紀も話してこなかった。

車の中でラジオのザーっという音が響き渡っていた。

今日はクラスメイトにも会えない…。何かありえない現実に立たされていた。

現実の崖っぷちに立たされるということはこんなのだな、と再び実感した。

といっても、これはリアルなのだから逃れることは不可能。

自分が生んだ運命から逃れることはできなかった。

そうこう考えているうちに総合病院が目の前にあった。

お母さんは玄関から一番近い第一駐車場に車を走らせた。朝が早いのか知らないが、随分と車がすいていた。止まっているとしても8、9台。入院患者だろう。

でも、あたしもいつかこのようになるんだろうな…。

でも…そんな…。

「…ちよつと美紀！聞いているの？」

母が3度も言っていることに気が付かなかった。

「あ…ゴメン。」

「さあ、早く行くわよ。怖がらなくてもいいから。」

母に強引に病院へと連れて行かれた。

玄関を入ると、安河内静が迎えてくれた。

そのまま小会議室へと案内された。

「美紀ちゃん。今日のことは母さんからきいてるよね？」

「うん…」

「では、これを見てください。」

差し出されたのが何枚もの検査表だった。

「では、今から今日のすることを説明します。今日一日で精密検査するのもちよつときついで二日に分けて検査します。その間は入院してもらつことになりましたが…了解されますか？」

はい、と美紀と母は言った。たった2文字であたしの人生が変わる…。恐ろしい。

「では、とりあえず今日一日ですね。まずは心電図検診へといつてもらいます。そして昼ごはんをはさみますね。その後、レントゲンですね。その後CT検査です。今日としてはこの三つですね。案外時間がかかりますので、できるだけ効率よく行ってください。」

1 . 心電図検査

2 . 昼ごはん…

3 . レントゲン…。

4 . CT検査……………。

20時00分。

全く疲れるわ。あたしを殺す気か！

という思いで病室へ戻ってきた。

ここで一泊するのかあゝという思いでベッドに転がった。

昔はあの病気で2・3週間くらいいたな。とても懐かしい…。

母は家に帰って寝ることになっていた。当たり前だが。

いつもより寂しく感じた。一人の病室、白いベッド、小さなテレビ…。

懐かしいし、よけい寂しい…。眠たい…。

そのまま美紀は力が抜けた。

……………。

チツ・チツ・チツ。時計の鳴り響く音が響き渡る朝。美紀はボーツとした。

思い返せば今は病院にいたんだ。それ自体を忘れていた。

「おはよ。」

「……………へ？ギヤアアア東野君…」

ゲ…あたしのパジャマ姿が…」

「ど、どうしたのよ？学校は…？」

「いや、君が心配だったから来たただだよ。クラスの代表として。」

…これって…神様…」

その時、横からバサツという布団が落ちる音がした。隆は美紀の隣に腰かけた。

「なあ、大丈夫か？無理スナナよ…」

「だ、大丈夫よ！あんたになんか言われたくないわ！」

クスッ。隆は小さな笑みを浮かべた。美紀の胸の鼓動が高くなつていく。

「な…何なのよ…。9時に寝たから大丈夫よ！」

「あつそ。もうすぐ母さん来るんじゃない？」

「そうだ…けど？」

「ならおれそろそろ行くわ。」

うん…。この一言が言えなかった。

隆が取っ手に手をかけた…。ヨシ！

「ねえ、東野君…。もうちょつと居てくれない…かな？」

隆の目が点になった。

「ご、ゴメン。俺今から学校あつから！」

アリア…。

思いっきり駆け出した。それを母はしつかりとこの目で見ていた。今までにない速さで母が走ってきた。驚き…

「みきい？あの人なんて言うのかなあ？」

不審げな顔で聞いてきた。

「東野君だけど…。」

「もしかして…彼氏!？」

ゲ…なんでやねん! (殴

「そ、そんなわけないでしょ!」

「ホントに…?」

美紀が何か言おうとしたとき会議室へと先生に呼び出された。

人生の岐路（上）（後書き）

ありがとうございます。

次回もどうぞご覧下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3466v/>

かんらんしゃ

2011年10月8日23時36分発行